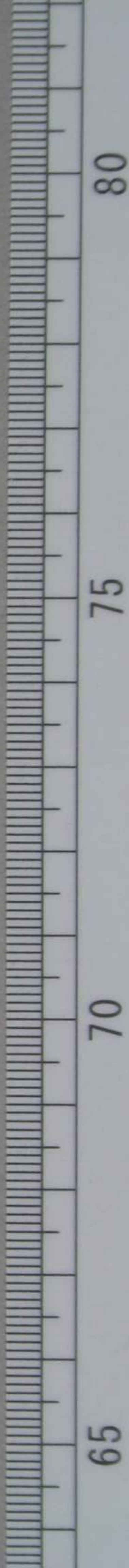


野 葡 萄

晚 村 作



65

70

75

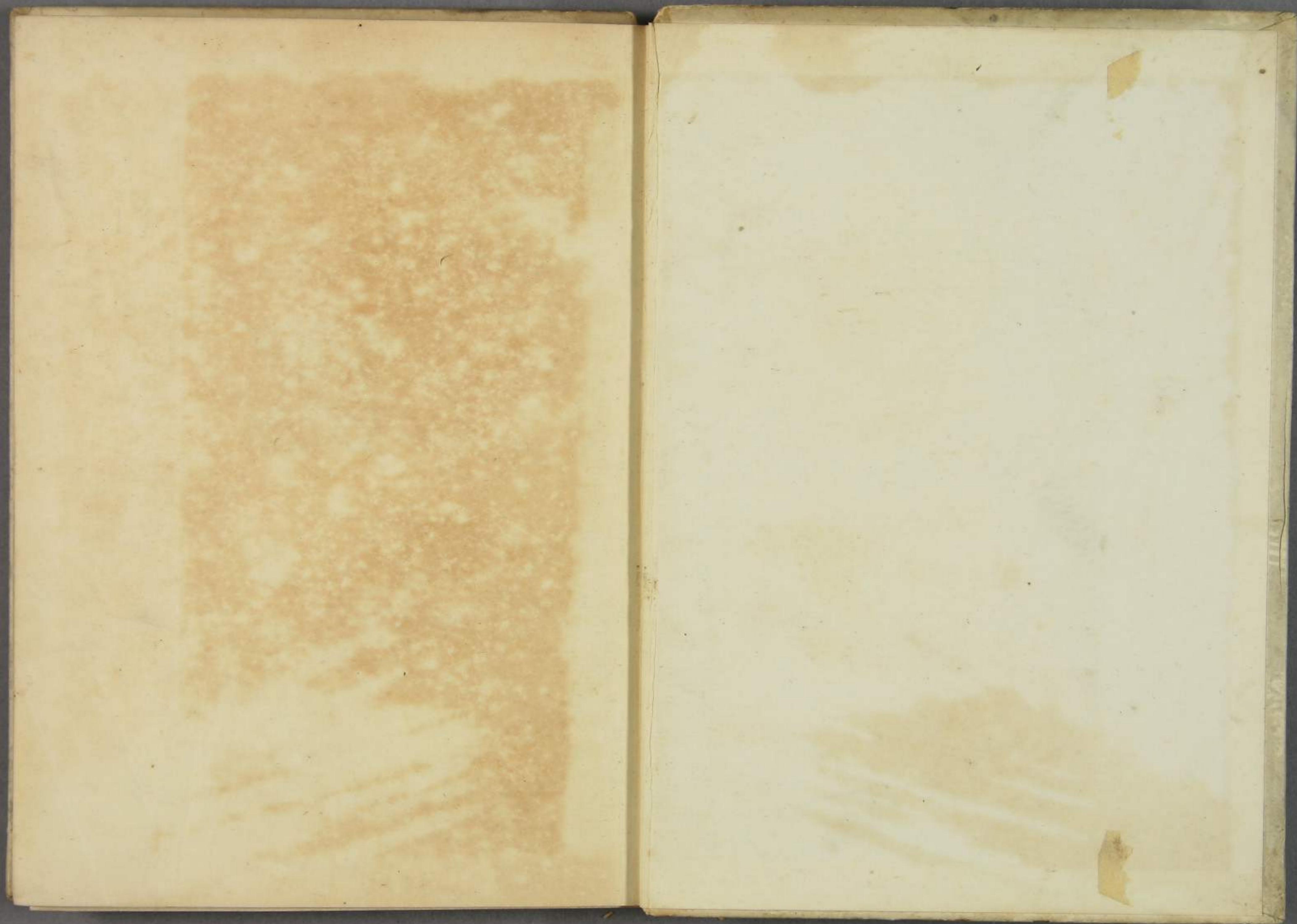
80

社
院
版

村晚

社會資合
院書民國
版藏





野 葡 萄



平	橫	相	夏
井	瀨	馬	日
晚	夜	御	漱
村	雨	風	石
作	序	序	序

版 藏 院 書 民 國 會 社

野 葡 萄



平	橫	相	夏
井	瀨	馬	日
晚	夜	御	漱
村	雨	風	石
作	序	序	序

版 藏 院 書 民 國 會 社 資

□序

『野葡萄』に序を書けと云はれたとき、何か書かうと受合つた儘、書く事をつひ忘れて京都へ立つて仕舞つた。京都では花に雨に神社に佛閣に、古めいた春の景物に忙しくて、眼も足も足らぬ位、心をそらに身をさかに、洛中洛外を驚とよもに飛びあるいて、序の事などはまるで思ひ出せなかつた。歸つてからは茫然として四五日を晩春の頬杖に暮らして、閑寂の趣を豆腐と奈良漬に得た代りに、義務も勉強も夢にさへ見る暇は

なかつた。

『野葡萄』の序は斯様にして遅れたのである。申譯がない。自己の文集なり詩集なりを公けにするときには發行の日が待ちに待たれるものである。晩村君も定めて『野葡萄』の上梓を急がれた事であらう。只放埒なる余の萬事打ち遣りなるにも關はらず、一日の年長なるに遠慮して今日迄催促せられなかつたものと見える。猶猶申し譯がない。

然し余が適當の時間内に義務を果さなかつた爲めに果したよりも却つて面白い結果が生じたと思ふ。序の

依囑を受けた當時は余は大學講師であつた。依囑せられた晩村君は無論大學講師だからと云うて余を擇ばれたのではない。けれども世間の俗人は余が大學に關係があるから頼んだと思ふかも知れない。従つて大學講師なる余が晩村君の詩文集の序をかけば間接に詩人晩村君に累をなす譯になる。余も心持ちがよくない。半月ほど京都に遊んで舊廬に歸つた余は最早講師ではない。十餘年に卒業したと云ふより外に大學とは何等の關係もない身分となつた。『野葡萄』の序をかくには文科大學の先生が書くのではない。個人の漱石が書くの

である。個人の漱石を擇んで序を書かせる晩村君は、個人漱石に一種の興味を有する外に何等利害の考へはない筈である。この義務を果す漱石は江湖の處士として詩人晩村君の依囑に應じた迄である。洒然として愉快を感じる。

『野葡萄』のうちに收められた幾篇の短詩短文はよく晩村君の性情を流露して、學位學祿に好惡を左右せられざる君が人格を證明して餘りあるものと信ずる。

明治四十年四月二十三日

夏 目 漱 石

□序

平井詞兄

先日東京の宿所宛にお送りくだすつた『野葡萄』のゲラ刷を昨夜初秋のやうな月影のさしこんで居た此の家の窓際で拜見しました。僕は去る二十一日の朝に東京を出て、その日の夜おそくこちらへ來たのです。それにして僕も僕は貴兄の此の詩集を東京に居るうちに手にしないで、此の北方の田舎町の自分の生れた家の、しかも月のさしこむ窓際で封を切らうとは思ひもかけま

せんでした。わけても

『可愛し戀しのわが夫は

佐渡は四十九里波越えて

遠い小島へ金掘りに

若い身空で去なされた

.....

.....』

と云ふやうな野調で歌ひ出された作を、偶然にも紺碧な海のあなたに佐渡の島山を見渡すことが出来たと云ふのは何と云ふうれしいことでしたらう。

もうあと三日で七月だと云ふのに、此の土地から眺められる日本アルプスの山々は中腹から上がまだ眞白です。黒味を帯んで澄み渡つた空に冴えた月の光は秋を思はせます。音もなく暮れて行く日本海岸の漁村――そこでは透き徹るやうな聲で唄ふ追分のメロディが毎夜のやうに聴かれます。

其の追分節の哀調、僕は昨夜貴兄の詩のかずくをただ獨り低い聲で口ずさみながら、いつとなしに朗吟の調子が其の哀調に似通つて行くのを感じました。貴兄の詩のリズムがその哀調に似通つて居るのか、僕の

情調に沁み込んで居る追分節のメロデイが、おのづから貴兄の詩をそのうちへ溶かし入れたのか、そのいづれともわからないけれども、兎に角貴兄の詩を低唱する僕の調子が、いつとなしに追分節のメロデイに似通つた一種の節調を成して來たことだけは事實です。

それについて思ひ出すのは、先頃世界漫遊の旅から歸つて來た僕の友人の或る音楽家が、日本の音楽で西洋人の耳にもすぐに理解されるものは追分節のやうな民謡で、手の込んだ三味線の曲なんかは到底外國人には理解されさうもない、風土を異にした如何なる國の

人々とも共鳴し合ふことの出来る音楽と云へば、矢張民謡的のものでなくてはならぬ、と云ふやうな事を話して居た事です。

平井詞兄

繊細な官能を持った都會の人達はどうか知らないが、北海の波の音を聞きながら育て上げられた僕などのやうな田舎者には、どうしても民謡の野調があらゆる音楽のうちで一番多く親しみが感じられます。僕が貴兄の詩に對して今更のやうにしんみりした懐しみを感ずるのも、要するに貴兄の詩が一種の民謡的な野調――

しかも拵らへものでない眞實の野調——を生命として
居るやうに思はれるからです。そして貴兄の此の詩集
が世間へ公にされた後に、僕など、同じやうな懐し
みを以てそれを緋く人の決して少くない事をも今から
想像されるのです。どうぞ一日も早く『野葡萄』一巻が
さう云ふ人々の手に渡るやうに希望致します。

大正四年六月二十七日

越後糸魚川の生家にて

相馬御風

えびの子は
なりぬらむ
あをじかからむ

どいめの色に
いではがかけむ

えびの子は
くさがくれ
けふか下り來む

どいめ色せり
山の爰磨

えびはむと
やはらかき
いとし新妻

葉にはな觸れそ
刺の立つらむ

卯の春

横瀬夜雨

□十年一昔

□『詩集を出してみたい』——一圖に恁う思ひつめて、熱心に、眞面目に、原稿整理に夜の眼も寝なかつた若々しい眞剣な努力——この原稿を纏めてから丁度十年になる。自己の力量を顧みる暇もなく、さうした努力を無駄にして夢の間に齡を拾つた事が、却つて今の自分には幸福であつたやうに考へられる。

□苗——莖——葉——蕾——花になるまでの『時』を待たずして、拙ないものを公にしなかつた事は、せめて

もの心慰めである。學校を出てから十年の間、忙しい
明暮にも尙好める道を捨てなかつた趣味の收穫を加へ
得たる事は、偏に上梓の遅れた爲めの賜物であつたに
違ひない。

□この集に收めた數十篇の詩は、すべて自分の全力を
注いだものである。何等の野心なく、時間の拘束を受
けず意の動く儘に萬事を放擲して努力せる趣味の收穫
であり、且つは前半生の事業として、意義あり執着あ
る處のものである。——この小冊子を手にするの時は、
静かな回顧の坂にたつて、薰風に汗を拭きつゝ、麓の空

を眺めやる旅の欣びを思はずには居られない。

□題して『野葡萄』と云ふ。——赤城の裾の草の淺きに、
小さく冷たく色づける葡萄の珠よ。——暖簾の影に坐つ
て見た故郷の山から、短かうなりし夜の隈に、椎茸賣
りの人たちも降りて来よう。祖母病むと聞くこの頃の
佗しき心には、合歌の葉みどり沁々と静けさを思はせ
られる。

□この集の校正央ばにして、自分は悲しむべき祖母の
訃に接した。

大正四年七月一日午前二時五分歿。

順信院釋貞保善意大姉

俗名 平井ゆき 行年六十八歳

すでに位牌となつた祖母の面影は、いつまでも佗しい寝ざめに忘れる事はあるまい。――病軀を運んで古郷にかへり、了覺寺へ送つた立派な葬儀は、祖母の生涯を紀念すべき最期の『光』であつた。

□今も尙病みつゝある自分は、惱ましい夜毎の夢に祖母と逢ふ事が多い。――鳳仙花を佛前に剪つての朝、葬儀の日の事ども思ひ出でゝ

別れ惜かる、名残も惜め

そつと覗いた白木の柩

胸に組む手に水晶の珠たまが

ほろりくと佗しげに

石で釘うつ柩の蓋に

何と書かうぞ別れの唄を

墨に磨するとして和尙に急せかれ

袴はくやら、羽織着て

母の白無垢、納めの小袖

うつゝないぞえお寺の軒へ

草履ぬいだる七夕月の

逢瀬絶えたが本意もなや

せめて新盆、提灯つけて

迎ひ進ぜる芋殻の煙に

茄子のお馬を召さりようならば

夜路浄めてお供する

心ならずもこの集は、祖母が新盆の靈前に供へる事となつた。

○夏目先生の序文は、ずんと昔に戴いたものその儘を夜雨氏はこの春送つて呉れたものを。御風氏は糸魚川から態々送つて下さつた。自分の最も好もしき先輩三氏の厚志を深く感謝する次第である。

大正四年七月十一日

東京四谷の寓にて

晩村生

目次

□思ひ出——勞作五十二編

目次	
□落葉松	二
□淺間の煙	四
□柿の葉	六
□十三夜	九
□松毬	一一
□猿曳	一三

目次

□宵のひらめき	一六
□夢の渦	一八
□わが弟は	一九
□魚燈	二一
□あかつき	二三
□おち髪	二五
□伯母の家	二七
□東の間	三三
□曇草	三四
□水沫	三七

目次

□山の町	三九
□水引草	四三
□片あかり	四四
□復活	四六
□望郷	四八
□鳩の湖畔	五三
□宿り木	五七
□湯道者	五九
□お小夜	六〇
□日影の街	六四

次 目

□ 和子の七夜	七
□ 山の中村	六
□ 観音寺	七
□ ちぎれ雲	七
□ 汽車の窓より	八
□ 阜月もくれて	八
□ 湖落	三
□ 町はづれ	五
□ わが夢は	七
□ 時雨の宿	〇

次 目

□ 瀨の石	四
□ 泊り客	五
□ 垣にかくれて	八
□ 後の吉三	〇
□ 木綿襪	三
□ 水雲莊	五
□ 菱の實	七
□ 宵の心	九
□ このごろ	〇
□ 雪の朝	三

目次

□ 旅情	二四
□ 日曜の朝	二六
□ 堂守	二八
□ 霜の聲	二九
□ 栗見の莊	三三
□ 彼岸の雨	三三
□ ひな唄——野詩二十七編	
□ 落人	三八
□ 賤のならひに	三〇

目次

□ 赤城つゝじ	三四
□ 機織女	三八
□ 旦那の供	三九
□ 鈴菜の嫁	四二
□ 柳の葉	四三
□ 雀のお宿	四四
□ 知らぬ在所	四六
□ 父憎らしや	四八
□ 神樂役者	四九
□ 京の染屋へ	五一

□藪入	一五三
□富士の白酒	一五五
□短かい袖	一五七
□露提灯	一五九
□下ごゝる	一六〇
□娘なりやこそ	一六一
□卯月八日	一六三
□春を待つとて	一六四
□落葉の風呂	一六六
□小室でる時	一六八

□切草履	一六九
□上總國原	一七〇
□すげ笠	一七二
□佐渡が鳥	一七三
□ひとり者	一七六
□こぼれ麥——小曲三十二編	
□晴れて逢ふまで	一八〇
□日暮の雨	一八一
□踏青	一八三

次 目

□ 砧	一八四
□ 向日葵	一八四
□ 乗かけ馬	一八五
□ 雪の夜明	一八七
□ かん鴉	一八八
□ つらく椿	一八九
□ 狐こはさに	一九〇
□ 短か夜	一九一
□ 落葉	一九二
□ 幼き順禮	一九三

次 目

□ 釋のひまに	一九四
□ 都鳥	一九五
□ 夏瘦せ	一九五
□ 儘よ小笹に	一九六
□ 木魚	一九七
□ 荊の花	一九八
□ 籠行燈	一九九
□ 月の暈	一九九
□ 帆ぐるし	二〇〇
□ きりくす	二〇一

思
ひ
出

篇二十五作勞

目次

□磯の旅	101
□鐘も氣になる	103
□畑打	103
□ほとたる	104
□うす蒲團	104
□妹に摘まれて	104
□伊吹艾	104
□粉川寺	104
□盃	104

——目次了——

■落葉松

山國やまくにの秋のゆふぐれ
 落葉松からまつの並木なみきのはてに
 瘦ひそせてゆく日脚ひあしを罩こめて
 立つ煙けぶり——峠たがひのなだれ
 しめぐと濡ぬるゝ光に
 沈しづみゆく秋の葉いろの
 滴したりや——胸むねに沁しみては

うは白みさしぐむ空の

山の影——河原蓬かはらよもぎの

明け暮れを悲しむ旅に

茶の花はうつろひ咲けど

『追懷おもひで』はいつか疲れて

浅くのみ小柴こしばの霜の

遠方とほ方に涙も凍こる

鳥のこゑ——小野をのの夕の

寂しさに羽搏もすらし

山國の秋のゆふぐれ

ほろくとおち葉は積る

野も山も振りさけみれば

白雲の寒きに暮れぬ

■ 浅間の煙

麥が穂に出て浅間が霞む

浅間は高き山なれば

雪に埋れて咲く花の

名もありなしや夕煙

信濃へ来ればはるくくと

鞍おく馬の鈴の音や

轡に浅き道柴の

葉に漂ひぬ春のいろ

つれなく暮れし菅笠を

傾げて莊をすぐるにも

旅の男——と少女子は
隠れていはず塙の草

野にきてみれば一筋の

路ほの暗し草蓬

かゝる例も旅人の

踏むにまかせて月は潤みぬ

■柿の葉

客人に火桶ぞまゐる

秋の夜の庭に忍びて
栢榴の實をこぼしつゝ
羽搏して鳥は匿れぬ

庭下駄や窓の障子に

薄霜はほのめき初めて

うたゝ寝の人の枕に

秋の夜はいたく更けたり

その夢の悲しき國を

紫の星は照して
流轉のおもひは歸れ
遠の山小霧は立ちぬ

おもふ時、おもはるゝ時
月はいま雲を離れて

柿の葉の雫を醸し
白壁に影を印しぬ

■ 十三夜

ことしまた

めぐり逢ひぬる

十三夜——秋のひと夜の

芋の葉に

乳母と寝なまし

月のかげ

楨の葉越しに

射ましくれば

潮うしほの如く湧く雲の

ゆくへは知らず

夜もすがら

雑木ざつきは煙る

十三夜——霜に降られて

山の奥

乳母うぼと寝なまし

■ 松 毬

|| 赤城の麓を行ける或日 ||

秋の日の赤城あかぎ平ならに

松毬まつまきはしきりに落ちて

夕ゆふされば牧まきの男が

笛に抜く草の名もなし

樅ぼんぼの葉はいつか黒みて

山の影森を浸ひたしぬ

遙けきは人に別れて
只ひとり小路を行けば

椋鳥は冥きに啼いて

雨と降る落葉のなかに

月出でぬ、かゝる夕は

踊子の逢瀬もあらむ

里ちかく路をいそげど
寂寥は胸を襲ひて

秋の日の赤城平に
松毬はしきりに落つる

■猿 曳

梅も咲かぬに何時までか

春をたづねて猿曳の

唄のあはれも武藏野に

つれなく暮れし太郎月

野路の旅籠のまるび寝に

小猿こさるいとしや破障子やれしやうし

春の光はひえぐと

軒のんの提燈あんどの灯ひに落つる

蜺しひの汗あせの貧ましさも

寝ねがての宿やどは更ふけぬるを

かたちばかりの門松かどまつに

霜しもや降ふるらし旅たびの空そら

召めされし猿さるを舞まはしむと

國くにの訛なまりを笑わらはれて

在所ざいじよの衆しゆのつれなさに

涙なみだおさへし日もあれば

まことや遠とほき津つの國くにの

山家やまがの妹いもの戀こひしさに

路ちみちの近ちかきを迷まよひつゝ

降ふりこめられし笠かさの雨あめ

あづま廻めぐりの業わざに

つ
連れたる猿を捨てかねつ
ま
泊りくの片枕
ち
重き草鞋に途を急ぎて

■宵のひらめき

たそがれ
黄昏の雨にはためく
なるか
雷神のすぎたる跡に
かたく
蛸は淋しく啼きぬ
ま
束の間雨に濡れたる

あかしやの葉末のみどり
な
柔らかに日影は縫れ
お
時の鐘、西に響きて
あ
闇の穂を疎らに植ゑし
あ
天地の宵のひらめき
あ
仰ぎみる大海原と
あ
雲は行け、潤める空の
あ
遠方に夢を迎へむ

■夢の渦

乳兒ちごはいま夢をむさぼる
母衣ほろ衾なごの裾のみどりに
夢の渦いつかほぐれぬ

白熱はくねつの光汗ばみ
うとくとくと眠るあそむ青草
さながらに思はあらむ

夏の日の眞晝の空に
ゆきかへり雲はかよへど
翼なき『地上の夢』は

南天の花にうつらふ
虻あぶの聲、夕ぐれ時の
静けさによすがへ廻りぬる

■わが弟は

わが弟おとは

難波のみやこ

明暮を暖簾のかげに

うづくまり

父母おもふ

商人の

舗のならひに

叱られて寝し夜の夢の

いかなれば

明易きかな

はるごと

難波のみやこ

訪ねきて葦の一節の

いたづらに

弟を悲しむ

■ 魚 燈

磯の草

わづかに暮れて

天の河、旅の情も
津の國へ
つゞく浮雲

帆を捲いて
船もかよはず
濱の街、梶の葉ぐれの
宵闇に
魚燈は灯る

濱の夜の
更くるも知らに
踊子の袖と袂は
蟲の音の
露に濡れたり

■あかつき

雨の脚おちぬさまに
亂れ降る、曉ばかり
合歡の花軒に咲きたり

ひたすらに心惑ひの
扉とをあけて遠との國原
東雲しのめの色に親しむ

かゝる時かゝる邊ほとりに

憂人うれひとの袖は振るべき

ひたすらに情は籠めて

一すぢの途みちをそがひに

別れゆく雲の涯ほとりこそ
西ひがし空を隔つる

雨の脚踏みぬさまに

亂れ降る、曉ばかり

合歡の花軒に咲きたり

■ おち髪

月悲しさては夕の

夏瘦せをいとしむ垣の

忘れたる戀のおち髪

細きもの涼暮どきの

眼に見えず、嘆のあとを

蜘蛛の糸はかけゝむ

柱をおきて弾けとや人の

紫陽花のはなに匿れて

うかゞへば戀は貧しき

■伯母の家

—

鳩啼く山のもどり路の

木の實にそめし唇を

夕の風呂に叱られて

つれなき伯母と恨みしか

御寺の鐘に石なげて

おき忘れたる豆太鼓

鳴らぬが耳のわびしさも
子守となりし秋の晝

二

人にとられし肩揚を
とがむる親はなけれども
鏡ほしさの前髪に
梅もかざせる朝の井や

春の霞に笠浮けて
都へかへる紅賣に

旅籠の連をたのまむも
市に恥かし藁草履

三

巢にいとけなく山鳥の
ひろはれし身ぞ、霜の夜は
枯もちぬ、人まねて
唄の上手となりけり

音頭をかしゃ筑波根の
麓の村の盆の月

口紅くちべにさいて踊子やどりこの

戀こひのこゝろも唄うたふかな

四

それもよかるに

稻いねの穂結ほむすびさしてしてみやれ

情こころ知らずか

踊やどり自慢じまんのやさ男

よいやな

それもよかるに

筑波つくば詣まうでの笠かさきてござれ

主ぬしは馬追

柿かきの驛とまりで名残なごりも惜おぼめ

よいやな

五

秋あきの茄子なすびをちぎるとて

畑はたけの露つゆに後姿あととを追おひ

かへりおくれし戀故こひゆめの

憚はげりがちや伯母おばの家

龍馬の蟲に泣かれて
 寝し夜の夢を盗むには
 狐あまりに賢しうて
 かへりみもせぬ、樹がくれの里

■ 東の間

一つの世の漂泊人か
 立添ひてときめく胸の
 『悲』を草に秘し、
 紅苺——夕さり來れば

ほの泛ぶ色も『東の間』

にほひなき壁畫の跡に
 儼がれてけふも登りし
 山寺のいさら井汲めど
 いかなれば『心の泉』
 枯れて行く根には濺がむ

あゝ『孤獨』

山寺の夏の日脚に

残されて昔を懐ふ
愁たさや、古りし壁畫に
追想の詩をとどめて
立いづる闇は東の間

■ 鬘 草

君歸る — その倂の
滅えもせて夏のさなかの
薄れ日に — 花もさびたる
紅の鬘草

君がかざしに忘られて
灼かに匂ふ — 赤心
われやいま寥しう在りて
聴き惚れぬ — 心の惑
光なき胸の虚を
潜りては堪へる空音に
啼き交す怪しき鳥の
影逐ひてつらる運命に
曳く糸の小田巻繰れば

花もみん——涼きし空や

二筋の路の涯こそ

遠ざかれ——旅する君に

夕顔の花咲けば

瞬間の戀の別れを

降る雨よ——袖ふり急げ

暮れぬ間に

あゝ君歸る——昏黄

珠さぐる心の闇の
擴ごれは——向ひ小山の
夏雲に蝶鳴けど
戸に立たず一人灯影の
色草や——露にいとむ

■ 水 沫

あゝされど心は暗し
いつまでか戀の空穂に
唇ふれて渴ける胸の

抱かかん

君が乳房のしたよりを
醸すにも

日も錆びし嫩葉の色
我が瞳には沁みたれば
行き悩む——憂き心

扉をめぐる水沫のはての
月代や小竹の葉書の

横雲に光亂れて
君おもひ——けふも暮れたり

■山の町

屋根の石、枝の小鳥も
冬ざれて風に啼くかな
國堺信濃にいれば
酔さむき家もまばらに
澁柿は叩かれもせて

目白さへ住まぬ時は
馬の尻やせてぞ越ゆる
追分のとほき麓や

二

冬雀、軒に啼いては
提灯に霜もながるゝ
山の町、風呂吹く人は
猿に似て頭巾のうしろ
丸肩の老は狸か
小六月笠にかくれて

物申す片側町は
時雨れむの旅籠いそぎに
茶の花の路も暮々

三

落人か錢を數へて
ひそやかに日和かたるは
曉の鶏に追はれて
こそくと里にいでたる
孫娘戀ゆる遠く
婿とりの米藏すてゝ

旅鳥、旅になけども
祖母詣る念佛堂の
鉦きゝもならぬ夜寒は
山の宿、木枕かたく
いさゝかの夢に酔ふかな

水引草

子持の山の夕虹に
蚊帳つりがての君ならば
去ねかし人に戸は鎖して

待つ身をいとへ丸行燈

命をかけて水引の
花に結んだ戀文を
寢醒の君にひろはれて
袖がもつれた夏祭

涼くれ舟の纜も
君が情にほだされて
きつゝ馴れにし吾妻川

瀬せになく鳥も稀まれなれば

浮うかれ鴉からすにだまされて
軒のきば端はの合あ歡はのさめぬまに
河かはら原はら急いそがむ小こ女め郎らうの
待まちつ灯ひをこめて夜はくだちけり

■ 片あかり

疎そとましき雲の光の
おとづれに涙なみだ流ながれて

片かたあかり——桐きりの紫むらさき
咲さかぬ日ひも思おもは浮うぶ

夢ゆめの穂ほの雫しづくうるほひ
新あららしく昔むかしを憶おもふ
わが心こころ——仄ほろかに開ひらく
花はな桐きりのうつろの恵めぐみ

總おぼていま暗くらきに歸かへる
片かたあかり——夢ゆめをたのみて

滅びゆく『光』を逐へど

『日の翼』あとなく消えぬ

かゝる時——胸に渦まく

『哀悲』の底の響の

瞬間を傳ふごとく

片明り——檐にまぎれぬ

復活

雲の銹、秋の深みの陽の斑

なごめる夢のうま滴り
仄かに浮べ、あゝ復活

乳も涸れし命のあらび、葉に濁る
月の光は青さびて胸に潤めど
瑞木は海のかなたに

潮の音の響くを聴きて
わが心、みづ葉がくれに
忘れたる燕の古巢

流れ木か濤間がくりの
泡沫と命の啓示、落日の
うするゝ力、あゝ追懐

大空の秋のなげきも甦へる
夢の扉にかへり花して
復活は新たに芽ぐむ

望郷

床にゐて
蝉なけば
夜もすがら
ゆめも靡かん
旅人の
秋の小袖の寒ければ
ふる郷の
妻をおもひて
名ばかりの

つゆの一夜の

おもかげを

胸にゑがけど

烏羽玉うはたまの

轍わだちのはての

しら萩や

旅のあけくれ

いつまでか

知らぬ在所きしよの

秋ふけて

越ゆる峠ぞ

旅すれば

心ぼそさに

眺めやる

遠とほのやま川

秋風に

吹かるゝ雲の

別れども

逢ふは縁か
 われのみは
 けふもきのふも
 芒刈る
 妻とわかれて
 疲れたる
 夕の空に
 星かげの
 潤むをみれば
 おのづから

涙流るゝ

■ 鳩の湖畔

いづれの日
 君に逢はんと
 青草に
 なびく煙の
 はて知らぬ
 丘越えくれば
 静けさは

夕の湖うみに

たゞよへる

雲のひとひら

たそがれの

光うるほひ

たゞよへる

雲をしみれば

ふたり居て

秋のひと葉に

歌かきし

夕をおもふ

いづれの日

君やかへると

待つひまに

秋立ちぬらし

白鷺の

聲はすれども

さぐなみの

鴉カラスの湖畔湖畔に

来てみれば

こゝろこころ寥さびしや

たゞよへる

雲のひとひら

かゝる時

君をおもひて

立ちつくす

ゆふべの空に

秋のいろ

沁しみみて繾くれて

東路とうろの

花と咲くらむ

■宿り木

ほのほのくと

その紫の花咲けば

蔓つるも涼しく宿り木どきは

軒のきの小雨こぼりに咲き濡れて

心なげなる旅の空

せめていま

假かりの宿やどりに旅人たびびとの

夢ゆめを盗ぬすみて咲く花の

命いのちなりせば明日あすはまた

峰たかね越この里さとの酒井さかに

咲さきやなれむ宿やどり木きの花

湯道者

山やま蘭らんは

枝えだにつられてさめくと

峠たげの雨あめに日は照れど

柴しば踏ふみわけて河原湯かはらゆの

軒のきにつゞけるもみぢ道みちに

立たつは煙けむりか、蔓草つるきの

僅わずかかに咲さきし花はなのいろ

蝸ひらしは峽なの細道ほそみち夏の日に
 妻つまとわかれて吾妻おつまはや
 その上かみつ毛けの湯道ゆぢやう者は
 旅たびの情なさけも小竹こたけの葉はの
 心細こころこわさに捨てかねて
 ことしも行くか落葉かろう松しょうに
 暮くれれて灯ひともす湯ゆの澤さわの宿しゆく

■ お 小 夜

國原くにがはらはるに吹きわたる

風かぜも冷つめたきたそがれは
 千萱ちかきの丈ぢやうに行燈ゆでして
 添乳そでの夢ゆめもうらみしか
 霧きり降ふるなかに只ひとり
 利根とねの河原かはらの圓石まどいしに
 情なさけの布ぬいもながくと
 打ち靡なびけたる砧きぬたゆゑ
 郎らうゆゑ、われは泣明なみす

旅の情のおもかげと
忘れし身は黒髪を
取りあげて結ふ朝もなく

秋は悲しき物思ひ

裏戸うらどに立てば山つゞき

麓ふもとの路みちをかくすまで

僧そうや落葉おちばも積らうに

立歸るべき父もなく

母とふたりよ、樹こがくれの
里さとにいつかは大人おとなびん
わが子の末がいとしさに

唄うたもうたはず、水引の

花はなに逢瀬あせも絶えたれば

手絡てがらもかけて面伏おもぶせの

眉まゆにつれなき月の影

■日影の街

曉の鶏もうらまじ立歸り

また逢はむ日の君とおもへば

さはされ君が水髪に
牧の小草のはるふくと
夢こそ靡け春風は
霞の空や隔つらむ

遠きに歸る漂流の
身ぞ嘆かるれ如月は
梅に名残の夜をこめて
別れもをしめ袖の雨
日影の街のきぬくを
かへり見すれば扉にたちて
袖ふる君のいとしさに
遙けき路ぞ仰がるれ

人に逐はれし古郷の
つれなき思ふ身にしあれば
君が住む家の玉椿
胸の鏡に咲くものを

別れていつか立かへり
亦逢はむ日の君ながら
悲しきかなや旅衣
花に反きてけふも暮れたり

■ 和子の七夜 (芳夫誕生の夏)

黄昏は人も訪ひ来ず
打水の跡の籬の
蔓草に風はわたりて
静かなる和子の七夜よ

てひもお
古郷の音便の端に
祖母はいま「曾孫見にまかる
欣び」とありしを讀みて

行く雲の彼方を懐ふ

三歳にて兄となりたる

一の兒を膝に乗せつゝ

名ばかりの心祝ひと

夕月に膳は据ゑたれ

今宵より父と寝ぬべき
一の兒の可憐しらしさに
門に立てば涼しき庭の

草に居て蟲は唄ひぬ

■ 山の中村

赤城をめぐる木枯の

霜を敷きゆく上野や

利根に添ひたる山なみは

畑の桑の葉も落ちぬ

残れる柿にうつる火も

赤う焚けばか山の湯に

貝は吹かねど布子きて
里の和尚はのぼりけり

紅葉の橋の中たえて

鳥も越えざる山かげは

狸が撞くか達磨忌も

淋しき寺の暮の鐘

鎌にあまりし新米を

洒すも寒き山の井の

釣瓶をもきに子を想ふ
母もあらむに落つる日や

灰の暖きに芋いけて

眉こがしつゝ爐の邊に

神樂の笛を吹き習ふ

山の男は拙なうて

ちひさき月に筵して

乙女心はしほらしく

谷をへだつる小夜砦さよきだ

情のかずの槌の音

盗人ずどもなき山中の

村の霜夜は静なれど

わが古里と呼ばんには

あまりに淋し戀のなれば

■ 観音寺

石につまづく観音寺

叩けば鉦かねも臙やめく
姥ばあが眼鏡めがねに春こめて
霞も空の仁王門

孫が情の杖ついて

のぼれば嬉し観音寺

鳩はとの尾を吹く春風に

佛ほとけも若うおはしけり

笠かさの紐と解く方丈ほうじやうの

軒にならべる春の山
茶を煮る釜に霞して
里になまめく菜の花や

嫁が在所の白壁に
かくれて小さき茶摘み笠
陸める戀のしばらくを
晝餉の貝に別れけり

ふと見る寺の豆男

ことしも古里の春を戀へど
歸る由なく眉ふけて
かつぐに重き草箒

捨てよと云はじ姥捨の
山の麓の観音寺
佛の淨地はきよけれど
孫ゆる姥は里へまからむ

ちぎれ雲

一

病めば悲しき手枕たまくらに
通なひ馴なれたる蟋蟀こはるの
なく音ねもさむく秋更けて
夢路ゆめぢやいかに騒ぐらむ

湖うみにそひたる家なれば
ほのかによする夕波に

翼をかはず雁がねの
玉章たまぢまつが淋しとや

二

涙の跡あせのふり袖に
伽羅がらこそこのこれ、別れ路ちの
君を泣かせてはるくくと
遠きにやりし戀ごゝろ

うらみ葛の葉ひるがへるも
歸らぬ君を越えさせて

おもひ
俯おもひげぶる鏡山

雨あめやふるらむ錦木にしきぎの

三

その日は昔、おもひでも

つゝましげなる花櫛はなぢの

君きみとそひ見みし山鉾やまぼこに

願ねがひもかけて草祭くさまつり

宵よの格子かぢの繪行燈ゑいどうに

はぐれて逢あはぬいく歳とせを

別わかれて人の戀こひしさに
泣なみき濡ぬらしたる小夜衣さよえ

四

君きみよ痛いためる胸むねだきて

夕ゆふの門かどにたつなかれ

風かぜの寒さむきにほる／＼と

落葉おちばや肩かたに重おもからむ

夜長よながの宿しゆくのひとり寝ねに

こぼるゝ髪かみのつめたくば

つもる思を假名書の
文にこそ巻け夜もすがら

五

とても別れて、徒らに
涙ぞいまの慰め——と
へだてつくせる曉の
霧にほの照る月みれば

み空にかけし鶺鴒の
橋のたもとの後朝や

別れともなき行ずりに
濡れし袂か——ちぎれ雲

■ 汽車の窓より

汽車の窓より古里の
空の煙を眺むれば
われも昔は蝸に
泣かされて寢し手枕の
祖父こそ思へ、ふる里は
日毎の桑も摘みはて

市に賣るらむ玉蘭の
そのたまさかの歸り路を
待ちわびて焚く箱風呂の
煙に咽ぶ祖母をこそ思へ

■ 皐月もくれて

皐月もくれて降る雨に
枕涼しきうたゝ寢の
夢明るきを驚けば
灯はともされて古里に

ひとり淋しく病めばとて
ゆかりとめ來るふり袖の
妹たゞずまぬ垣なれば
空しくしほめ待宵の
花咲くまゝに蚊帳つらせけり

■ 凋落

うら悲し霜月下澆は
山焼の煙もなびけ
寒菊の花は板戸の

影に咲く冬の日なれば

空曇りつゞく山なみ

寒々と啼ゆく鹿の

行衛にもおもひ知られて

わが心しきりに痛む

かゝる時いづこともなく

迷ひきて軒に佇む

さらばひし巫女は暗きを

迎りつゝ落葉を踏みぬ

桑ばたけ山はたそがれ

をちこちの樹ぐれの闇に

ともし火は瞬きそめて

人はみな霜に籠りぬ

町はづれ

春の日は――

梁にゐてつばくらめ

藍麁に藁を翻しぬ

午さがり

判木のうへに紋型を切る

紺屋の縮のいと柳は

障子に揺れて日のながき

町はづれ

薬湯の煙に浮ぶ

木蓮は梢も瘦せて

花咲きぬ

いくとせか照り白む
光に濡れてほろくと
崩れし春の
おもかげに立かへりぬる

■わが夢は

わが夢は
海士の鹽木のいつまでか
黒髪はけさも翻れて
あさましき

枕の塗に
佛はさむく映るも

秋の日の人は遠きに
立つ煙空に消えつゝ

吾妻はやその山かけて
雨ぞ降る

けふも昨日も

さやくと海越えて
山起えて
秋ぐもは通へども

わが夢は
海士の鹽木のいつまでか
はなれ小島の
磯がくれ、潮の音の
咽むを聴けば

肌はだに沁しむ秋あきの一ひと葉はの
日ひに錆さびて夕ゆふは落おつれ

樞くる戸どの暗くらきに馴なれし

わが夢ゆめは

曉あけの涙なみだに濡ぬれて、涯はたもなく
胸むねに潜ひそまむ

■時雨の宿

一

人目ひとめも草くさもかれぐの
峠たがひの路みちのいとしさに
暮くれれて手てを曳ひく夕月ゆづりづきの
影かげはづかしや二人ふたり連つ

げに落人おちひとの裾すそからげ
麓ふもとの宿やどへいそくと
ぬぐ菅笠すげがさは佗たしうて
暗くらき行燈あんどんの物ものおもひ

二

喃、さりながら郎故の
浮名は嬉し、想はれて
想うて交すにひ枕
旅の情と捨てたなら……

捨てられたなら落人の
いまの浮名のうれしさを
せめての戀の追想に
切つて進ぜう黒髪を

三

隣の客をはぐかりて
泣む濁酒に唄もなく
宵寝はすれど落人の
戻りの籠の酔こゝろ

戀なればこそ松風に
結ばれやすき夢もみて
ぬるゝ袂やはらくと
時雨ぞつゞけ驛路の宿

■瀬の石

瀬の石は砂にかくれて
鶴鴿の脚に踏まるゝ

さゝ流れさゞ波たてば
水沫さへ影はあるもの

わが戀のいつまでかくて
包まるゝ昔のいろ花

瀬の石は砂に埋れて
世を知らず——雲の光も

■泊り客

すがれて残る寒菊の
籬の雪はかるくして

大師詣の傘に
かくれて我は泊り客

春の小路にさそはれて
二の字をひろふ町外れ
雀はまろく吹雪かれて
黄昏そめし向ふ山

雪折笹の音もたえて
妻戸おろせし春の夜は
一夜の客のいとしさに
心ばかりのあられ酒

濃茶もたてゝ徒然の
互にうつる影法師
更けてはさむき口紅を
逢瀬の郎に恨まれたな

寝ざめつれなき雪の日の
軒端がぐれのかへりみに
袖ふる君と別れては
いく山河や隔てけむ

紙衣かみぎの皺しわにいつまでか
泊とまりりの客きやくと唄うたはれて
春はるを惜おしまむ、さりとても
ふりさけ見れば路みちは遙々はるか

■垣かきにかくれて

茶ちやの花寒さむき上州じやうしゆの
野末ののすえに春はるは立ちぬれど
枯かれたる草くさにうつろはぬ
情なさけのいろの浅あければ

垣かきにかくれて十六いそ夜の
月つきの光ひかりを懐なつかしむ
乙女おんなごゝろはほのくくと
霞あせの空そらに打うなびき
足尾あしびの麓ふもと、桑かきの根ねの
乾かわびし土つちに蒔まき捨てし
冬菜ふゆなは摘とめどしかすがに
櫛くしのち小さきちが侘わしうて

さあれ嘆かじうらくと
やがて茅花の穂をぬきて
眉刷く夢のうれしさも
嫁となるべき帯も、小袖も

■後の吉三

なまなかの寺入りに
可愛しらし君を殺して
夏瘦の吉三が夢は

迷ひ行く鈴が森

暗がりに刺を抜くとて
寄り添ひし前髪ゆゑに
われ故に君を殺して
ことしまた空の星逢ひ

七夕の梶の葉袖に
お七どの参ると書いて
心やり——落つる涙に

その頃の事を思へば

瘦馬に雪の襦袢

後ろ手に繩を打たれて

泣きながら八百八街

見納めの火刑の首途

戀ゆゑの胸に燃ゆる火

黒髪は煙に朽ちぬ

あゝ、其も昔となりて

われ獨り——嘆き老ひぬる

■木綿襦

李の花に日は濡れて

しめやかなれば樞戸を

ひき急ぐにも賤機

母や忙しくおはすらむ

結ほれてのみ老ひぬれば

悲しき母の木綿襦

櫻を絞る雨だにも
暮るれば肌はだに沁しまんもの

母は子ゆゑに日もすがら
夜すがら我は母ゆゑに
ほろ／＼と啼なく山鳥やまどりの
胸の鏡は曇くもれるを

夕雨ゆふあま迷ふ草の穂ほに
はぐれし夢は騒さわげども

野路のぢの玉川たまがはいつまでか
岸邊きしべの花の散るを惜あはまむ

■水雲莊(淺田氏別莊)

綠涼みどりすずしき武藏野むさしのの
一夜いちやの雨のさゝ濁にごり
夕ゆふさりくればころ／＼と
河鹿かしかも聞かん籠枕かごまくら

美しくし人か――ほの／＼と

闇にそよめく湯上りに
庭のつゝじの花わけて
白石橋も渡りけむ

都の客を引きとめて
螢をつゝむ羅に

月ものぼれば川沿ひの
芒がくれの里の唄

蚊帳のつり手の短か夜を

書き残すべき歌屑も
僧や主人に拾はれし
水雲莊はよき處

■菱の實

山鳥のなくなる方よ！
かへりみのわれが嘆を
訪ひもくか鐘さびしげに
草更けて月まろき野の
かげもなき春の心や

ふと聴くにおつる涙よ
 幻まぼろしと鐘かねの音ね追おひし
 うたかたの流ながれなる身は
 竹の花ちり浮くよりも
 もろかりき、人にかくれて
 さすらひの夢にあくがれ
 落ちてゆく水に似し身は
 ながれよる山の湖みづうみ

菱ひしの實みとひとりかくれて
 秋の日はさこそ嘆なげかん

■ 宵の心

庭に咲いたる水引の
 花も結ばず夏瘦せて
 襟えりにつめたき水枕
 つめたき床とこの夕ゆづかな
 紅べにもさゝねば鬼灯ひょうたん子の

青きながらに風みえて
秋待つらしき野の雲に
啼きつゝ歸る鳥の影

ほのかに庭の夏草は
夕の夢をつゝめども
身は眠られて静けさも
蟲なく宵となりにける哉

■このごろ

君がうれしき唇の
燃ゆるがごとき血のいろを
ふくめば露の色染めて
葡萄の珠たまの齒には沁む

君がうれしき瞳めのいろの
うつるをみれば仄めきて
野に咲く花か、紫は
かけ元結の藤袴

さりや昔の思出に
くれゆく雲の分れ坂
落つる日を吹く夕風を
眉ふせて聞く、秋よこのごろ

■雪の朝

いさゝか雪の葉につめば
圓きが故に傘と見む
庭なる石路に小雀の
かくれて寒き朝啼や

炬燵を置くも水仙の
黄に咲く春の浅ければ
母は糸さへ貫きかねて
針の寒きを嘆つかな

かゝる朝げは都なる
厨の姉ぞ偲ばるれ
落せし眉のあと寒く
雪明りする水瓶に

凍りし水を汲みかねて
 なよび姿にまどふらむ
 (雪の戸に
 母おぼす日も
 多からむ
 妻と呼ばれて
 都の姉は)

■ 旅 情

別れてかむる菅笠の
 紐のやつれは記さねど
 旅の情のさびしさに
 母への文もかく夜かな
 雁は啼かねど潮風呂に
 足の疲れを忘れては
 肩に按摩の唄かろく
 葵ほのけき月の影

■日曜の朝(即興)

はてなき夢のあきぼらけ
權を忘れし舟人の
低き枕にふとさめて
静心なき一人かな

灰あたらしき小火鉢の
火花をふせぐ古雑誌
昔つゞりし四行詩に

有難かりし撰者かな

白魚の寸を膳に愛で
燕肥えしを語りつゝ
澁茶を煮ると豆ホヤに
残る灯をふく臺所

書棚にもとむる文をえて
興こゝろなき文机や
鈴なるゆゑに出てみれば

門かどに久しき友が顔かな

■堂 守

格子かぢのつぼの鳥の音に

花はなの燈ともしのかた枕

寢ね簾せきつめたき堂守だうもりの

よしなき夢ゆめの姿かな

いさゝか出でし露つゆの芽に

春はるの苦くるしみきを味あじはひて

白しろ髪かみわびしき梅うめの扉しりの
日永ひながをたぎる釜かまの音

詣まよる人なきこの里に

夕影ゆふかげ春はるの葉はを捲まげば

堂守堂だうもりの扉しりをしめて

木魚こぎよの塵ちりに咽なげぶかな

■霜 の 聲

裏山うらやまの芒あしに落おつる

あかつきの霜の聲

いたましや妹が襷たすきに

目め白啼しろなくひより影

菊きくしろき井筒ひづを濡ぬらす

黒髪くろかみの櫛くしのひまにも

別れたる人を思ひて

忙いそしなや厨くりやの煙けむり

草くさの實みの赤らむ垣を

くゞりては人は通へど

この里は峠たがひのふもと

いつまでか人は歸らず

雲のいろうつろひ行きて

晝かかなし、雁かりの渡れば

■栗見の莊

まだ行きもみね、懐かしき
栗見の莊は——立つ煙
日脚をにくむ鴨も
夕の枝に啼きかはし

暮れゆく軒に置く霜の
空も侘しき箱風呂に
呼べば艶めく鄙ぶりの

女もあれな垣隣

君は東女——水髪みづかみの

その元結もとむすの君ゆゑに
戀慕れんぼ流しや笛吹いて
芒あやがくれの豆男まめをとこ

■彼岸の雨

常磐樹とぎはぎや
しめやかに濡るゝ日脚ひあしも

伏し馴れて枕に暗し

花曇——けふは彼岸ひがたの

雨降ると人はいふ

ふと思ふ

わが故郷の父の墓

しづくくと木の芽やすらし

母や行く——その寺町てらまちの

破れし傘かさぞ眼まなこに泛うぶ

かゝる時

春の日のやがて暮るれば

わが心痛むと知るや

いまさらに——けふは彼岸ひがたの

雨降ると人はいふ

ひ
な
唄

野詩七十二篇

落人

小野の下路はるくくと
忍ぶに馴れし頬冠り
照る日も曇る胸にさへ
人の情の雨は降る

日暮はことに菜の花の
向ひ小山の葉がくれに
豆の莢ほど出た月影を

拜んでのけた嬉しさも
手絡に寒き春の霜

『あの夜思へば思はせ振な

春戸の畑の葉鶏頭

わざと萎れて篠竹の

露の葉袖を引留めた

『あの夜思へば思はせ振な

春戸の畑の水引小花

わぎに萎しをれて踊子の
宵の草履を引留めた

野越え山越え来て見れば
知らぬ在所の夕畑
木の芽に沈む寺々の
鐘も懸ゆる嘆かれて
泊とまりを急ぐ二人づれ

■ 賤のならひに

賤のならひに
米も磨とぎいれ
軒に椿の落つる日を
ことしも泊とめた紅賣べんばいの
京訛きやまりも品しなようて
切れた草鞋のいとしさに
米も磨とぎいれ
さらくと

賤のならひに

柴も刈りい

春山せやまの雲くもの涼すずしさも

つゝじの花に残る夜は

宵よの別わかれの本意ほんいない郎らうに

もしや逢あふかと嬉うれしさに

柴も刈りい

いそいくと

賤せんのならひに

白しろも挽ひき

山の芒あしのささやくと

霜しもに鳴る目は白挽しろひいて

粉こなにまみれた袖そでたもと

その狭さ筵むしろの寂さびしさに

白しろも挽ひき

くよくと

賤せんのならひに

馬うまも曳ひき

山坂やまざか越えて冬ふゆがれの

市の炭屋の格子口

赤い手絡にはらくと

雪がちらつく忙しさに

馬も曳きい

りんくと

■赤城つゝじ

赤城つゝじも葉となつた

山家の空はなつかしや

僅かふた宵寝て起きて

都へ戻る、途すがら

汽車の窓から麥の穂の

さやく暮れる夕風も

何とはなしに悲しうて

山の姿も眺めたに

夕焼小焼、利根川の

橋を越えれば田圃路

桑摘唄も忙しさの

妹に禱を遣りたさに

父は草鞋をはくと云ふ
その上つ毛の夏の雨
さらりと晴れた野の杉に
昔のまゝの月が出た

祖母は寝てやら、杖ついて
日暮の路のあぶなさを
いとしがられて戻るやら

手を曳く孫と別れては

汽車に揺られて物思ひ
土産に貰うた染糸の
あやめも分かぬ宵かけて
蛙の聲がころくと

戀もゆかりも手枕の
うつゝに過ぎた國原や
また戻る日の嬉しさを

ひとりの旅に數へながらに

■機織女

いとんくからと投げ梭の
忙しない日も髪結うて
貰ひ風呂する茶畑で
郎に逢はうの下ごゝろ

信濃豆柿、上州の

桑は枯れても氣にやかけぬ

山焼け野焼けいつまでも
胸に焚く火は絶やしやせぬ

年季明けたは嬉しいが
去にともなさに飯焚いて
娘ざかりの片だすき
捨てられる迄、知らぬ他國に

■旦那の供

雨も降らぬに傘さして

旦那迎ひは阿呆らしや
水の難波の船宿の
暖簾覗くが恥かしく

顔も馴染まぬ繪芝居の
噂に暮れし夏の夜は
ほぐりの鈴に送られて
旦那の供の橋いくつ

戻り遅さを叱られて

積荷の陰に泣けばとて
わしは丁稚の身ぢや程に
袖に縫らう姉もない

■ 鈴菜の嫁

連とはぐれた鶯は
籠の媼にひろはれて
使ひ歩きの裾からげ
山の古巢が戀しかる

道を忘れてしをくくと

ひとの軒端に啼いたとて

雪崩ゆたの峽がの奥山に

梅も咲くやら、咲かぬやら

所詮見捨てた世ぢや程に
綿弓わたゆりひいて畑打つて
いつそ他國たこの婿選み
鈴菜の嫁とならうもの

■ 椰の葉

沖の小島の椰やしの葉の

葉うらの闇に月が照りや

そよいろくくと取舵とりかぢの

泊り舟とまりふねやら櫓ろが撓しほる

沖の小島の椰やしの葉の

葉うらの闇に月が照りや

磯の小女郎いそのおんなが出て招く

半夜逢はねば尙さら

一夜逢うたら柳の葉を

二夜逢うたら柳の樹を

三日來ぬ夜は伐り捨て

月の出潮を知らせたい

■雀のお宿

宵の吳竹——雀のお宿

泊めて泊らぬ戀ならば

なぜに菅笠傾げて行かぬ
眉も落さぬひとり旅

よしや袂はちぎれて捨て

馬の草鞋に踏まれても

こゝろ一筋わき目は觸らぬ

ひとつ枕に用はない

情知らずか、盲目の戀か

泊めて泊らぬ旅ならば

いつそ憎らしみかづき三日月さまよ
是非に軒端へ顔見せた

■知らぬ在所

向ひ小山の霜の葉に
けふも淋しや日が暮れる
知らぬきよ在所へよこされて
子守の唄もうたはずに

辻の館屋の豆太鼓

とんくからと鳴らしても
啼きやまぬ子は憎らしい
一層、田圃へ捨てようか

あの山越えた柴がくれ
父はあれども蓑蟲の
壁のこぼれに啼き明す
貧しい軒へ戻らりよか

ねんくころり、ねんころり

泣いて呉れるな黄昏たむけの

忙しい春戸の切草履

這入りもならず、行き戻り

■父憎らしや

お母お母戀しや、父憎お父らしや

落葉搔くやら砧も打たせ

何が不足で子守に出しやる

辻で日暮しや子供に泣かれ

泣いて戻れば霜降る庭へ
裸はだして突き出され

村へ戻るか、時雨の渡舟わたし

お母お母戀しや、父憎お父らしや

更けて船漕ぐ人もない

■神樂役者

霜に降られて隣の村へ

神樂役者かぐらやくしやに頼まれて

來ては踊るに素足は寒や
足袋もはかれぬ貧しさに

笛が鳴るく太鼓が囃す
手ぶり拍子は拙いけれど
赤い提灯數ある唄の
戀も情も知り申す

落葉散るく祭の宵の
更けて戻りの一本橋に

野良の狐が娘に化けて
ちよいとおいでと手招いだ

逢うて嬉しや別れの鐘に
ふつと眼さめりや木の根の枕
宿へ土産の酒樽茶飯
みんな奪られて夜が明けた

■京の染屋へ

可愛けりやこそ旅させる

親は縊つづれを着きればとて
まさか、脚絆つづの紐ひもくけて
娘むすめざかりを離はなさりよか

京きやうの染屋ぞめへ貫くわんはれて
暖ぬく簾れんの奥おくの春風はるかぜに
目鼻めばな立ちたら、氣き立たなら
よい嫁よめ御寮ごれうと褒ほめられて
嬰や兒いをまうけて眉まゆ剃かつて

戻かへらう春はるを待まちつ母はは
孫まごの産衣うぶぎをちらくと
老おいの眼鏡めがねに縫ぬいひ申まをす

■ 藪 入

春はるの仕着しぎの白足袋しろあしぶきに
高齒たかぢの下駄げたもからころと
簪かんざしも挿さして花櫛はなぢの
娘むすめもどるが嬉うれしさに

老の炬燵に粉炭の
寒きを吹いて餅焼いて
胼を劬はる母ひとり
娘ひとりの片羽鳥

たま／＼逢うて泣き暮す
頼りない身の昔にも
羽根突き逸れて羞らひの
少女の戀はあつたもの

家藏賣つて裏町へ
疊む暖簾の名も惜しく
人の情に拾はれて
水仕の業の悲し、明暮

■富士の白酒

内裏の雛は京育ち
口をすぼめて居るけれど
客の見ぬ間に夫婦づれ
富士の白酒飲んだげな

彌生おぼろの風にさへ
屏風かこうた嫁御寮
大切な殿と添ひながら
扇落した膝の上

雪洞消して口説して
春中合せは咎めぬが
うつらくとうたゝ寝の
夢を鼠に盗まれな

■ 短かい袖

雨はしよぼく降つて来る
傘を忘れた寺子屋の
戻りの坂の茶の花に
短かい袖は寒からう

繼しい母の聲聞いて
首を縮めた井の端に
足を洗うて畏まる

お千代は父に叱られて

油買ひに、茶買ひに
遠くの町へ急ぐにも
提灯もない暗がりの
畦せきに轉まんで膝ひざ剥むいた

■露 提 灯

都忘れて鄙めく宵の
蟲も聴きき頃風呂かげん

芒はなれて梢にのぼる
月も嬉しや砧も欲しや

語り更して扉しほの別れ
路にこゝろ置く露踏めば

さげた提灯夜ぶけの草の
露の寒さを家土産いっせに

■下ごゝろ

庭の花桐なげ伐り召さる

對の箏筒と立琴と

塗の枕を造らへて

嫁をとらんす下ごゝろ

門の芒をなげ刈り召さる

馬を肥して鞍置いて

襖障子を張りかへて

婿をとらんす下ごゝろ

裏の桑の葉なげ摘み召さる

蠶飼はせて衣織つて

京の染屋で染あげて

お宮詣りの下ごゝろ

■娘なりやこそ

娘なりやこそ、

毬を突きますぼんぼこぼんと

長い袂は春中で結び
邪魔な前髪剪つても欲しや
それた手毬が怨めしい

手毬突くととて

櫛を落して二つに割れた

金の蒔繪は惜しうはないが

京の土産の手箱の雛を

憎い鼠に咬られた

卯月八日

梅の如月
唄にだまされ手毬に浮かれ
寺の御坊に逐ひ立てられて
右と左に別れて歸る
長い廊下に日が暮れた

卯月八日はお釋迦の誕生
おらが在所の上人さまは
甘茶煮よとて茶釜が御座らぬ

けさも綸子の笥帯しめて
木魚枕に寝て御座る

袈裟も撞木も賣料なして

破れ衣は酒ゆゑ濡れる

お釋迦好きなのは甘茶で無うて

甘茶もらひに厨をのぞく

日傘がくれの不二額

■春を待つとて

旅に病む身は可愛しう御座る
けふも落葉に火桶を抱いて
薬煮るとて遠山みれば
雪のつもらぬ空もない

煤と掃かれて戸に立つ暮は

佗しかるぞや彼の瘦木立

鳥も泊らぬ野末の茶屋の

破れ障子に灯がうつる

けふも昨日も野篠の笛の
七つ音色を枕に聞いて
春を待つとて名のみ枝を
軒に植ゑい——蓄みい。

■落葉の風呂

春戸の榎に鳥が来て
日暮の山のちか道を
戻り待つげに雪國は
寒ういぞや灯がともる

足らぬ乳房を泣きもせて
いぢらしいぞえ布子の肌
和子に寝るげな、あの山がくれ
見えぬ父ぢやの人でなし

信濃山國——小室の驛で
玉子酒して在所を忘れ
けふも戻らぬ、落葉の風呂に
胸の思ひの火をもやす

■小室でる時

町の盡はつれの桑の樹に
雀が啼いて日が晴れて

お山お見やれほそくと
煙立つやら靡くやら

様へくと草木も靡く
軒の小笹もわが袖も

小室こむろでる時おぼえた唄を
知らぬ昔がなつかしい

■切草履

宜よい兒こ泣きやるな泣いたとて
お宿やどは遠し乳は無し

日暮の山の山がらす
晩ばんにや母かぢやが添乳する

よいく夜道は寒からう
烟の荳がからくと

切れた草履の足もとに
三日月さまが恨めしい

■上總國原

裏の林の憎らし鳥よ
いつも暗いに起されて

霜に降られてほろくと
釣瓶つるべ重きに泣くものを

見知らぬ旅の空へ来て
水も汲んだり藁わら仕事
使ひ歩きの袖しぐれ
落葉を踏むも心から

上總國原かみくにがははるくと
戀ひわたるとも今更に

在所の手まへ眉剃つて
捨てられた身が歸らりよか

■すげ笠

野から麓へ峽から山へ
連も無いやらあめ牛曳いて
ついで見馴れぬ鑛山かよひ
なぜに菅笠新らしい

鑛山通ひを七年すれば

藏もたつげな屋敷も買うて
納屋に米搗く小唄の節を
あのや若衆に習ひたい

情知らずか口なし鳥か
呼ぶに答へぬ落葉の門を
ついで見馴れぬかな山かよひ
なぜか菅笠新らしい

■佐渡が島

可愛し戀しのわが夫は
佐渡は四十九里波越えて
遠い小島へ金掘りに
若い身空で去なされた

金の釵、玉の櫛

桐の箆筒に五百兩

千石船に帆をあげて

歸るは何時の春ぢややら

寝物語りのひと言が
嘘でないなら真なら

箆筒や櫛や釵や

それは什麼でも戻らうに

いつそ千鳥が恨めしい

わしも行きたや佐渡ヶ島

可愛し戀しのわが夫は

遠い小島へ金掘りに

■ひとり者

蓑ほのふくと春雨の
 市に鳴らした花鉄はなてつ
 椿も御座る、如月のきげの
 梅にたいたる伽羅もい
 寝醒の髪にかざすとて
 歌妓うたねに召された花料はなろうに
 もらうた櫛はさらくと

解との戀の謎ぢやげな

霞かすみにしめる紙衣かみこきて
 紐ひもにやつれたかくれ笠
 男盛りを髯ひげ寒さうに
 在所ざいしょへかへる獨り者

こぼれ麥

小曲三十二篇

晴れて逢ふまで

すいと伸びたる芒の身丈みぢ
野暮やぼに見えても腰ふり手振てぶら
露つゆに小櫛こくしは濡ぬらさうとても
山家やまが育そだちに嘘うそは無ない

恥はづかしいぞえ水引小花
袖そでも袂たもともはなして呉くれりやれ
眉まゆをかくした十五夜いそよさまの

晴れて逢ふまで帯解かぬ

日暮の雨

來きては覗のぞくに隣の嫁よめは
色が黒くろいか目鼻めばながないか
後うしろ向むかいてはしくく泣なきやる
蓬餅ほうびんでも欲ほしいのか

涙なみだ拭ぬくのは念ねんないけれど
在所しよはなれて機織はたる窓まどに

心細きよ日暮の雨が
けふもきのふも降るぢやもの

踏 青

夕焼こやけ山焼の
山の鬼奴が噯して
春の日暮の紙風
川の東へ飛んだげな
川の東のなつ谷

なつ曲りの杉の木に
西が晴れたら草鞋つくれ
明日は出て踏め春戸の麥

砧

七反畑の霜の夜の
垣根に寒き頬かむり
袖口寒き手をあげて
砧の數も十五六
何が願ひで打つのやら

雪より白い飯炊いて
駒に黄金の鈴つけて
隣の村から婿もろて
米倉建て、千町田の
富限長者となりたさに
砧うつゝ、夜を明かす

■向日葵

洗濯すなる井の側の

忙しき母に叱られて
乳房はなせし思ひ出を
いまの我が子のうへに見る

日盛り暑き向日葵の
夕涼かけて傾けば
お庭を掃いて水うつて
戻らう父を待つは可愛ゆき

■乗かけ馬

おらが檀那は伊達しやてゐる
 通りかゝりの杵屋の庭の
 庭の橋乗かけ馬を
 とんとつゝんと繋いだ

そのや橋枕にかゝる
 朝の別れに袖曳きなやれ
 娘ありやこそ乗かけ馬を
 とんとつゝんと繋いだ

■雪の夜明

雪の夜明の嬉しさに
 お寺の軒の子雀は
 撞木のうへで一踊り
 朝げの鐘をつき申す

雪の夜明の嬉しさに
 お寺の軒の親雀
 けさも隣りの米倉の

依の蔭で啼き申す

■ かん 鴉

黒船山の杉の木へ

かんく 鴉が飛んで来て

何と云うてお泣きやるぞ

旅の泊りがない故に

お宿やどが無くば泊とどめて上あぎよ

一升まい買かうて飯ま焚いいて

椿は山程積んである
明日は途みちまで送おくらうに

■ つらく 椿

わしは

深山みふねのつらく 椿

風に吹かれて目を暮くらす

落ちもはてなば契あてもともに

空の浮雲名に残る

とても

嘆きを隔てはしたが

思ひ切れそな事もない

山と海とで契りもともに

ことし逢ふやら逢はぬやら

■狐こはさに

狐怖きうねほさに提灯さげて

貰ひ風呂呂する菜種の花を

誰たれと二人で刈らうやら

山の畑の小綿こわたの花を
弓にかけたり小袖にいでて
誰たれと二人で着やうやら

■短か夜

木母寺ももでらの

鐘の眞似して戸を叩く

其角きかくが宿やどは短か夜の

水鶏すみなを怨む籠まくら

涼しきみせて吊る蚊帳の
妻に焼かれた閨の蚊は
南無普陀落のいとほしや
戀の邪魔して殺された

落葉

落葉搔くまで大人びし
いたいけな子に母はなく
父は庄屋へ米搗きに
留守は隣りへことづけて

連もなければ只ひとり
裏の林で日を暮らす

幼き順禮

風に吹かれて冬すゝめ
逐ひ立てられて泣かされて
山河越えて行けばとて
顔も見知らず名も知らず
捨てられた身は情なや
軒端の霜に鐘を鳴らして

■襷のひまに

あは雪の
ちらりと消えた袖口に
白魚買ふさへ恥かしく
手鍋さげるは苦ぢやないが
留守のひとりに夕鴉
啼けば在所で別れた人を
襷のひまに思ひ出す

■都鳥

言問はゞ

何と答へる都鳥

いくら見果てぬ夢ぢやとて

昔男が業平橋の

橋のたもとで蜆賣る

■夏瘦せ

ほのくくと

君があたりの門の草
夕涼かけて道もせの
誰にしるべの糸車
見て呉れがしや、夏瘦の
うしろに咲いた水葵

■ 儘よ小笹に

しほくと
出て山みれば薄明り
濡れぬ先なら露草の

花にもいとへ袂たもと
どうせ浮氣な宵月さまに
儘よ、小笹の頬冠り
忍ぶがましかえ

■ 木 魚

戀のなみだの珠数だま揉んで
佛いぢりの尼さんならば
朝の木魚は静かに打ちやれ
門の花賣婿もろた

■ 荊の花

いくたびか
 ゆきも戻りも引きとめて
 何と荊いばらの花は咲く
 知らぬ顔して踏つけの
 刺とげが憎いとお言いやるが
 わしは野の花——露しもの
 宵よるの情にや濡れて寝る

■ 籠行燈

針のやりばにふと惑はれて
 里が戀しや乳母なつかしや
 壁が物云ふ他人のなかで
 涙拭かりよか籠行燈

■ 月の暈

夕涼ゆふすまに
 あれは野篠のしのの笛の音か

春の堺に忘られて
咲きおくれたる卯の花も
山の東のひとつ家に
蚊帳つりがての夏の雨
胸に焚く火の消えもせて
思はせ振な月の暈

■帆じるし

春が来たげな七浦かけて
磯菜畑に日が曇る

心細さよ鹽汲桶の
底の干ぬほど焦れて居れど
沖にならんだあの帆印に
情知らずか日が曇る

■さりがす

昔おもへばきりくす
春戸の月夜の逢びきに
啼く音とゞめたみじか夜の
いつまで瓜の花ざかり

■磯の旅

白帆數へて貝がら投げて
女浪男浪にその日を暮らす
宿の女中に手招されて
戻る二階の絹行燈に
旅は殊更都のそらの
たより待たる、渚なぎさの月にや
更けて佗しい笛も吹く

■鐘も氣になる

稀まに逢ふ夜の裏山傳ひ
宵の種蒔き聲かけられて
往きもならねば戻りもならず
鐘も氣になる夜も更ける

■畑打

春の日永のつれづれは
猫ひたひの額の畑打ちに

樋の軽さよ心も軽く
小判出^でる出る出ると打つ

■ほたる

露の干ぬ間と唄はれて
思^{おもひ}の蔓に咲く花の
その紫の東雲は
けふも照るく夏の日
葉裏に絶る螢蟲
こがれ死んでも宵闇の

ぎむればこ

風に情の身を任す

■うす蒲團

更けて聴けばか、はらくと
梢鳴らして降る雨に
佗しうないか薄蒲團
秋ぢやとすだく壁の^{こぼろぎ}蛭

■妹に摘まれて

ふる里の

ぎむればこ

板戸いたどに咲いた花ぢやゆゑ
妹いもに摘まれて捨てられて
祭まつりの宵よるの口紅と
可愛いとしがられた夜も御座る

■ 伊 吹 艾

さても見事や塗緒の雪駄
伊吹艾を袂に入れて
梅もいとはぬ、櫻も捨てぬ
浮うれ女をんなに灸あとおろす

男自慢おとこの透すき額ひたい

■ 粉 川 寺

泣くなと云うて泣く祖母ばあに
和讃をならふ鉦叩き
紀伊は札所せきよの粉川寺
父も知らないで、又、めぐる秋

■ 盃

祖父ぢぢがかたみの盃で

酔はりようものか忌明日
染めちやすむまい法燈が
寒うないかや、頬のほのみぢ葉に

了

大正四年九月二十二日印刷
大正四年九月二十五日發行

(定價金三十五錢)

野 葡 萄

著者	平井晚村
發行者	東京市神田區駿河臺袋町十六番地 河野正義
印刷者	東京市神田區宮本町五番地 高橋治一

發行所

東京市神田區駿河臺袋町十六番地
會社 國民書院
振替東京三〇〇九番

